

設立九周年を迎えて



理事長 寺田 斐夫

リバーフロント整備センターは、水辺空間のあり方、水辺空間の保全整備等、水辺空間に関する調査研究・技術開発を総合的に実施し、その成果を広く社会に活用して、安全で豊かなうるおいのある国土の建設に資することを目的として1987年9月1日に設立されました。以来9年間、役員一同、調査研究・技術開発に、また、広報にと、鋭意取り組み、順調な歩みを続けてきました。このことは、センターの設立以来から賜りました関係各位のご指導ご支援はもとより、「安全で豊かなうるおいのある水辺空間の保全整備」に対する要請が如何に強いものであるかということの表れであろうと思われます。この機会をお借りしまして関係各位のご厚情に厚く御礼申し上げます。

スタート以来この9年間、組織体制の充実をはかりながら、常に「リフレッシュ」を念頭におき、新しいテーマをほりおこし、組織の活性化、活気の維持に努めてきました。

また、本来の調査研究・技術開発は当然のこととして、データバンクの充実—技術情報の集積のほか、人と人のつながり—にも力を注ぎました。

また、人文科学、社会科学、自然科学等の学際間の、また、国、地方公共団体、公団公社等、財団協会等、大学高校小中学等学校の先生方、各種市民団体、民間企業及び一般の方々等いろいろな方面の方々の間での交流の場づくりにも力を注ぎました。単に、中央だけでなく全国の各地域地域で、それぞれに交流の場づくりを行うとともに、常に、情報の提供を行ってきました。最近の「多自然研究」の発刊、自然共生河川研究所の名のもとに岐阜分室の設置、河川生態学術研究会の運営等その一例です。

また、設立以来広報にも大きな力を注いできました。

機関誌「RIVER FRONT」の刊行、水に関する情報を掲載した月刊誌「FRONT」の刊行、各種パンフレットの作成配布、各種講演会、セミナー、研究会等の開催とその講演記録の配布及び各種団体の事業に後援協賛講師等の派遣等かなりの頻度で実施しました。また、調査研究・技術開発により得られた成果は、努めて皆様に還元することとし、「技術情報」「研究所情報」として随時に、また、ある程度纏まったものは「研究所報告」として、さらに一般的になったものは、出版の形で数多く世に出してきました。

また、学際的な幅広い知識技術をもち、企画力、創造力、表現力等を備えた人材の育成にも力を入れてきました。日頃の業務を通して、また、講習会、勉強会、講演会、視察等を通じて、さらに、事情が許せばつききりごと、いろいろな方法で取り組んできました。

また、国際協力も大きな柱として実施してきました。役員が海外に出張したり、海外に視察団を派遣したり、いろいろな分野の専門の方を招待したり、来日された方の機会をとらえたり、海外からの研修生を受入れて、技術情報の交換等を実施してきました。

また、当然のこととして、経営基盤の安定にも努力してきました。

非常に強い社会的要請のもと設立され、その後ますます社会的な要請が増してきていること、本当に幅広い方面の数多くの方々のご指導ご支援を受けたこと、内々の話で恐縮ですが、設立以来のセンター役員職員の熱意と献身的な努力によりまして、予想以上に早く成果を上げることができました。

1995年3月の「今後の河川環境のあり方について」及び1996年6月の「21世紀の社会を展望した今後の河川整備の基本的方向について」に対する河川審議会の答申、また、それらを受けての現在策定中の1997年度を初年度とする第9次治水事業5箇年計画の基本方針等をもみても、当センターの取り組む課題は、ますます重要なものになっています。今後十周年にむけて、財団の適性規模を計りつつ、さらに組織体制の充実を努めることはもとより、常にテーマをほりおこし、リフレッシュし、組織の活性化、活気の維持に留意しながら、長期的な、かつ基礎的な調査研究・技術開発への取組、調査研究・技術開発の継続性の維持に努めるとともに、データバンクについても、その充実はもとより、集積したもののとりだし、資料の有効活用が可能なシステムを構築していきたいと思ひます。

公益法人をとりまく環境はきびしいものがありますが常に設立の原点にたちかえり、当センターのスローガンである「安全で、豊かな、うるおいのある水辺空間の保全整備」をめざして、調査研究・技術開発に、また、広報にと取り組んでいきますので、今後とも変わらぬご指導ご支援をお願い致します。